バルザック研究の方向をもとめて

田村俶

「フランス文学でスキーが始めて登場するのはどんな作品か知ってるかい」

「『セラフィータ』のなかだよ」

フェリシャン・マルソーの『バルザックとその世界』(一九五五)にそういう問答がある。[1] それはフランス文学にくわしい小説通の着想にすぎない、といえばそれまでだが、この著書は昨今あいついで出版されたバルザックの研究書のなかでは異色のものである。

「小説家が時どきバルザックについて語るのも悪くはあるまい」[2]という言葉が序章にしるされているが、マルソーはいくつも小説を書いており、その『カザノヴァまたはアンチ・ドン＝ジュアン』は邦訳されている。そして小説家ではあるが、マルソーは『人間喜劇』のみならず多くの研究書からも博引傍証しているうえ、斬新な着想をおりまぜつつ、新しい『人間喜劇』論を展開している。原書は五百頁にわたる大著であり、逐一要約する労をさけ、原著のもつ二三の問題にしぼつて検討し、最近のバルザック研究を知る手がかりにしたい。

この『バルザック論』(以下『バルザックとその世界』をこのように略称する)は、最近の諸研究、たとえばビー[3]やベルトー[4]のようにバルザックの伝記をつづることも、バルデッシュ[5]やプリウ[6]のように作品形成の過程を跡づけることも目的としていない。そうではなくて、『人間喜劇』をノートル・ダム寺院のように「完成した紀念物」として受けとり、そのまんなかに突立つて、人物群像やその社会を検討していくのが狙いである。しかも、フェルナン・ロット編『人間喜劇の小説人物の伝記的事典』(一九五二)[7]のような詳しさがあるだけでなく、そうした事典とはちがつて登場人物に興味ぶかい解釈が加えられており、バルザックの世界への楽しい旅行案内書ともなつている。こうした特徴にもまして重要なのは、著者が個別的に小説をとりあげないで、『人間喜劇』を一つの統一的な世界として把握し、個々の小説に共通して現れる人物の面で論述をくりひろげている点である。《統一的な世界としての人間喜劇》というこの課題はあとで詳しく述べるように最近日定にあがつた問題点である。この現代的解釈をよりよく理解するためごく簡単にバルザック研究史をたどつておこう。

註1　Félicien Marceau : 《Balzac et son monde》(Gallimard, 1955)

2 ibid., p.9.
3 André Billy : 《Vie de Balzac》, (Flammarion, 1944) 2vol.
4 Jules Bertaut : 《La vie privée de Balzac》, (Hachette, 1950).
5 Maurice Bardèche : 《Balzac, romancier》, (Plon, 1947)
6 A. Priout : 《Balzac avant la Comédie Humaine》 (Courville, 1936).
7 Fernand Lotte : 《Dictionnaire biographique des personnages fictifs de la Comédie Humaine》, (Corti, 1952).

1、1つの回顧

『人間喜劇』の解釈にはサント・ブーヴ以来一つの伝統があつた。それは『ゴリオ爺さん』や『従妹ベット』などのいわゆる傑作のみを重視する態度である。この伝統派の見方は古典主義とのつながりにおいて、グランデをアルパゴンに、ベットをタルチュフに対応させながら、もつぱら人物の性格や情熱を論じてきた。最初のバルザック讃美者、テーヌですら、『人間喜劇』を《大型人物》の活躍する舞台として受けとめた（一八五八）。

しかし今世紀初頭、ブリュヌチエールを先頭にして新しい解釈が始まる。父性愛のゴリオや貪欲のグランデなどの情熱の化身のほかに、もつと重要な主人公がいるではないか、歴史という主人公が、という解釈。こうして『人間喜劇』のなかに時代相をよみとみ、小説相互の有機的な連関をさぐろういう積極性が芽生えた（一九〇六）。この新しい芽生えにファゲがなお冷たい態度をとつていたころ（一九一三）、プルーストはブリュヌチエールとは異つた角度から、バルザックの世界に革命的な発見をおこなつた。『サント・ブーヴとバルザック』[1]（一九〇九）における《人物再現手法》への最初の注目がそれである。しかしその最初の着想を発展させ『人間喜劇』全体のなかで再現手法を一つ一つ調べあげ、その基本型をいくつか実証したのは、エセル・プレストン女史[2]であつた（一九二六）。

なるほどモーリヤックなどは、「バルザックが集団のなかに一個人を孤立させており」、「彼のどの典型的人物も一つの星とほかの星とがそうであるようにたがいに独立している」[3]として、伝統派の態度を保ちつづけていた（『小説家とその作中人物』一九三三）。しかし四〇年代になると、人々は再現手法の意義を公認するようになる。たとえばバルデッシュは初期作品から『ゴリオ爺さん』までの創作過程を一つの発展として理解し、再現手法がこの傑作で始めて意識的に採用されている点を指摘し、さらにこの手法のもつ画期的な意義を定式化した（一九四七）。

「『人間喜劇』が存在しはじめてから、（バルザックの作品には）終点がない。全体の一部分であるおのおのの小説が完結すると、人物たちはほかの小説にふたたび現れほかの家やほかの夫婦のまわりで野心と失敗のバレーが続く。人物のたえまのない運動が人間の歴史なのであり、おのおのの小説はその抜萃にすぎない」[4]（傍点筆者）

再現手法による作品の連関、さらには『人間喜劇』の全体像の意味づけは、なるほど現代のバルザック研究家の共通テーマとなつている。だがそのばあい、バルザックを神秘家ないしは幻想家と見るか、あるいは逆に写実主義者と見るかによつて、全体像の内容は明白に異つてくるし、それは当然であろう。幻想家の側面を強調すれ

ば、バルザックの世界像はダンテの神曲などとの比較において天国と地上とを包む宇宙論的なひろがりを持つだろうし、写実主義者の側面を重視すれば、フランス十九世紀前半期の客観的歴史像という結論が生まれるのだ。たとえばガエタン・ピコンの『バルザック』[5]（一九五六）は前者の見方を、プラダリエの『歴史家バルザック』[6]（一九五五）は後者の立場をそれぞれ代表しているように思う。こうした最近の動向のなかで、マルソーの『バルザック論』（一九五五）はこれら二つの立場をともにとらず、あくまで『人間喜劇』の世界のなかで人物がどのように活躍し、離合集散するかを問題にしているのである。人生論的により、むしろ小説技法論的に。私は以下にマルソーの二つの視点――《人物の再現》と《集団の描写》――を中心にバルザック研究の動向をさぐりたい。

註 1 Marcel Proust : 《Contre Sainte-Beuve》 (Gallimard 1954.) p.218 et suiv.

2 Ethel Preston : 《Recherches sur la technique de Balzac》 (Presses françaises, 1926)

3 Fraçois Mauriac : 《Le Romancier et ses personnages》 (Ed. Grasset- Oeuv. Compl., T.III.) p.296

4 M. Bardèche,op. cit., p.390.

5 Gaëtan Picon : 《Balzac par lui-même》 (Seuil, 1956)

6 Georges Pradalié : 《Balzac historien》 (P.U.F., 1955)

II、同一人物の再現

すでに述べてきたように、ある人物にその過去の光をなげかけ別の環境へのつながりを与える再現手法のおかげで、『人間喜劇』は三次元的な広がりをもつようになった。マルソーはこの手法がなぜ発見されたかという点よりも、どんな意味をもつかという問題に多くの重要性を与えている。

A 人物名の羅列

周知のように『人間喜劇』にはところどころ人物名の羅列がある。これも再現手法の一手段であって、例をあげれば『カディニャン公爵夫人の秘密』のなか、夫人の数えあげる恋人たちの名前、『浮かれ女の盛衰記』のなか、晩さん会の出席者の名前の羅列、などがあるし、それ以外にもこうした事例は多い。具体的な例を『骨とう室』からあげよう。主人公の青年貴族ヴィクチュルニャンがパリの社交界にはじめて姿を見せるくだり――

「ヴェルヌィユ、エルヴィル、ルソンクール、ショオリュート、ナヴァラン、グランリュー、モーフリヌーズなど、またカディニャン、ブラモン＝ショーブリなどの公爵たちは、この名門の美しい遺児〔ヴィクチュルニャン〕を国王に紹介するのを楽しみにした」[1]

社交界の名士たちの羅列。『人間喜劇』の世界に入りかけたばかりの読者なら、おそらくこうした羅列にある種のいらだたしさ、退屈さを覚えるだろう。だが、別の小説でこれらの人物になじんでいればいるほど、かえつて彼らが群をなす必然性も納得できようし、親しみが湧いてくる。マルソーは右の引用箇所をこう解説している。[2]「ヴィクチュルニャンは一人ではない、彼は多くの縁故や九人の公爵たちが結びつけてくれるある環境の一員である」しかも貴族名の羅列によつて社交界のあるイマージュが浮かびあがるから「個人としてのヴィクチュルニャンの堅固さに、社交界の堅固さが加わる」こうして人物名の羅列は単に《再現手法》の一つの手段である

だとどまらない。さらに後で述べる《集団の描写》にも大きな効用をもつだろう。

註1　La Comédie Humaine,《Le Cabinet des Antiques》(éd., Conard. T.XI.) p.58.

2　Marceau, op. cit., p.22.

B　再現の頻度

『人間喜劇』の総登場人物およそ二千人のうち、再現するのは四百六十人である。最後には総理大臣となるアンリー・ド・マルセーなどはとりわけしきりに現れ、二十五回という最高記録を誇っている。有名なラスチニャックも再現頻度は高い。このような、主人公の役をはたしたほどの重要人物は除外するとして、つねに副人物だが再現率は高い人物にはどんな意義があるだろうか。

医学生から名医にまで出世するビアンションは二十四回、マルセーの腹心ロンクロール侯爵は十八回、顔を出すが二人ともつねに脇役でしかない。しかし、あまりよく登場するので、いわばおもしがそなわり、信用がつく、という解釈はおもしろい。

そのほか、法律家や建築家などのたぐいも職業柄さまざまの家庭、すなわち色々の小説に呼出しがかかる。こうしたおなじみの人物はさらに新しい人物の登場に際して、その人物に現実感を与える役割をも果している。なじみの旧人が新人にハクをつけるという二重の効果。

C　再現手法と時間

「ラスチニャック青年がパリの街を見おろして、「さあお前と決闘だ」と宣言するくだりは有名である。『ゴリオ爺さん』のこの大団円を読む人は誰でも、この青年の将来を想像してみたくなるにちがいない。しかしラスチニャックは以後、『ヌッチンゲン商会』とか、『女性研究』とか、『禁治産』などに副人物としてのみ現れる。読者の期待は、はぐらかされたのだろうか。

マルソーは人物がこのように、ある小説から他の小説へ移り変る、再現の《空白》にバルザックの時間がある、という。「わたしたちは知人のあとを毎日毎日たどるわけにはいかない。彼らは間をおいて姿を見せる。そのあいだ彼らは何をしていたのか。暗やみ。神秘。バルザックの《空白》もそれと同じである」[1]

『人間喜劇』ではどんな人物も死神に襲われないかぎり、再現の資格がある。しかも死亡とならんで新しい人物の誕生。『人間喜劇』はこの再現手法を通じて未来へ開かれている。時間の性格を規定していくうえでは、おそらくプーレの『人間の時間論』が参考になろう。デカルト的な時間でも、ベルグソン的な時間でもないバルザックの時間は、未来に無限のひろがりをもつ同質的な持続だというのがプーレの見方である。[2] しかしその未来はいかなるものか。明か暗か。人類の前途の暗示はないのか、といった問題はなお残っている。

註1　Marceau, op. cit., p.24.

2　Georges Poulet :《Etudes sur le Temps humain》(Plon, 1952) T. II. p.177. p.186-188.

三、集団の表現

ポール・フラの『バルザック論』(一八九三)以来『人間喜劇』の人物を分類する試みが二三おこなわれてきた。その分類では、(1)青年、(2)少女、(3)不幸な女、(4)みだらな女、(5)極端な人物、(6)芸術家、(7)町人生活、(8)地方生活、(9)田園生活、といったふうになる。

たしかに、バルザックを巨視的に論じるためには、クルチュウスのように《魔術》とか《情熱》とかの思想的命題に小分けしていくか、あるいはフラのように分析の角度に応じて人物を色分けするのが便利であろう。マルソーは一応これらを併用して、第一部を人物論、第二部を主題論に大別しているが、その著書は一貫して人物論の色彩がこい。たとえば法律家などは第二部二十章「裁判と警察」で、高利貸などは二十二章「金毛」で論じており、通読してみて、著者の意図はバルザックの観念的部分の探究にあるのではなく、小説人物の浮きぼりにあるのが、はつきり分る。しかしながら小説人物論を展開していく点で、一見フラの試みたような人物の分類をおこなつてはいるが、マルソーは分類だけにとどまらず、分類された人物の関連、従つて集団の問題を力説している。この点が新しい。

註1　Paul Flat : 《Essais sur Balzac》 (Plon, 1893)

2　E-R. Curtius : 《Balzac》 (Grasset, 1933)

「『人間喜劇』では孤独者は数まれである」[1]という主張が、この著書のライト・モチフである。『Z・マルカス』や『A・サヴァリュース』のような青年は孤独であるがゆえに『人間喜劇』では成功しないし、冷遇されている。そして彼らは再現しない。

「バルザックにとつて」とマルソーは述べている、「人間は他人とのつながりにおいてのみ存在する社会的動物である。バルザックの主人公は自分を越えることではなく、他人をしのごうと努める。その人物は社会のなかに入りこみ、社会のなかに自分の目的や武器や勝利をもとめている。人物は決して独りではない。孤独を望めば敗北することになる」[2]

孤独の拒否、そして集団の形成。この見方はきわめて正しい。

バルザックの人物は多少とも何らかの集団内の人間であり、集団の角度から『人間喜劇』のすじの運びを調査することも可能である。そして孤高ではないにしても孤独すら保ち得ず、集団を形成する点に現代人の一特色があるとすれば、人間関係の問題は検討に値いする、といえるのだ。

註1　Marcean, op. cit., p.169

2　ibid. p.294.

『ゴブセック』につぎのような一節がある。

「金は現代社会の活力なんだよ。わしら〔高利貸たち〕は同じ利害で結びついているから、週に何回かきまつた日に、ポン・ヌフのカフェ・テミスに集まる。そこで金融界のいろんな秘密をあばきあう。(……)わしらの一人が司法界を見張つていれば他の一人は財界を見張る。また一人は官界を、他の一人は実業界を見張るんだよ」[1]

これは一つの特定集団のむすびつき、そのなかでの各個人の役割を簡単にしかし正確に表現したことばである。それ以外にも集団の多くの型がある。マルソーに依つてその分類のこころみをあげておく。　(カツコ内はその一例である)

a　恋愛―結婚型

(『ゴリオ』のデルフィーヌとラスチニヤック)

b　友情型

(『幻滅』のリュシャンとダヴィッドの場合、『従妹ベット』のヴァレリーとベットの場合)

c　陰謀型

盗み（ヴォトランのグループ――『浮かれ女の盛衰記』）
享楽（『十三人組』）
利益（高利貸たち）
野心（マルセーのグループ――『結婚契約』）
慈善（『現代史の裏面』などの信者グループ）

d 家族型
全家族（『ベアトリックス』のゲニック家）
親と子（『泥かき女』のブリドー母子）

e 悪魔型
（『あら皮』のラファエル）

集団の基本的な型のきめ方にはなお検討の余地があるだろう。たとえばマルソーではとぼしい階級の概念や金銭の役割をたえず考慮にいれておかねばならない。そうした見方を忘れるなら、『骨とう室』のなか、田舎貴族の時代錯誤も、『セザール・ビロトオ』のなかブルジョア層の内部分裂と結合も、ともに正しく値ぶみできなくなる。

また集団相互の関係の複雑さを無視してはならない。たとえば集団間の依存の問題。なるほどマルソーは『プチ・ブルジョワ』の一節からヒントをえて、金融界のなかの集団をいくつかあげ、さらにその序列をつけている。銀行家グループ（ケラー兄弟やヌッチンゲン）を頂点に、一段下つて手形割引業者（パルマやジコネやゴブセック）、さらに下つて質屋グループ（サマノンやバルベ）、一番下に貧民街の高利貸（セリゼ）がいる、としている。それは正しい、とは思うが、それよりもむしろ、こうした集団相互の関連を私は重視したい。こうした金融ブルジョアは、ある時はお互いのはらのうちをさぐり、ある時は資金を調達しあつていた。『人間喜劇』では彼らの離合集散が大きい金銭の組織となつているのである。そして前述の分類、Cの《陰謀》の例が多かつたように、集団の組織は、バルザックの社会表現と直接につながる点に注意したい。例えば、『セザール・ビロトオ』第二部の背景には、銀行家グループと手形割引業者グループの密接な共同戦線がひそんでいる。またさらに、法律家と高利貸、法律家と商業ブルジョアのそれぞれの利害のきづなも『ゴブセック』や、『幻滅』に見えるところである。

こうして《集団の表現》という課題は『人間喜劇』のしくみを考えるうえでの第二の支柱になる、と私はいいたいのである。

註1. La Comédie Humaine, 《Gobseck》(éd., Conard. T.V.) p.398-9.

2 Marceau, op. cit., p.447 et suiv.

3 La Comédie Humaine, 《Les Petits Bourgeois》(éd., Conard. T.XX) 〈En haut, la maison Nucingen, les Keller, les Mongenod ; un peu plus bas, les Palma, les Gigonet, les Gobseck ; encore plus bas, les Samanon, les Chaboisseau, les Barbet ; puis enfin, après le Mont-de-Piété, ce roi de l'usure, (……) un Cerizet〉(p.128-129)

む す び

一九五〇年から五七年にいたる《Revue d'histoire littéraire française》誌所載の著作目録をしらべると、最近のバルザック研究もテーマが小さくなる傾向が強い。特殊な小テーマもけつこうであるが、その一方たえず大きなテーマを念頭におくことも重要である。たとえばマルソーの著述のように。そして上述したように大きな視野から『人間喜劇』を総体的にとらえなおすことに現代のバルザッ

ク研究の一方向が認められるとすれば、《人物の再現》と《集団の描写》とは欠くべからざる分析視角になると思う。

『人間喜劇』は、いわゆる短篇小説の集合でもなく、長篇小説のよせあつめですらない。さまざまの作品をつなぐという意識的連作なのである。バルザックの世界とは何かという、この問題には一筋ナワではいかぬ困難さがひそんでいるが、こうした困難さにいどんだ一つの労作が、マルソーの著作といえるだろう。だが難をいえばマルソーはこの課題に明確な結論をくだしてはいない。プラダリエやバルデッシュの提出している積極的な結論を知っているものには、そこにマルソーの弱み、小説家の好みが論理の展開に優先しているような傾向を認めざるをえない。たとえば彼は『神秘の書』などのバルザックにおける幻想家的側面にはまったく興味がないとして、すこしも言及していないのである。[1] 私はこの幻想家の側面が『人間喜劇』のなかでどんな役割をはたしているかを度外視できないと考える。この側面はバルザックにおける消極的な部分であるのか、どうか。消極的で価値のない部分であるとすれば、その点は積極的な価値と認められる「十九世紀フランス」の総体的表現とどういう関係にあるのか。興味のあるこの問題に深くたちいる余裕がないので、ここではバルデッシュのテーゼをあげておきたい。

「バルザックの思想には、存在の二重の体系、二重の階層秩序がある。ジョフロワ・サン＝チレルがスエーデンボルグに結びついている。社会の博物誌に霊魂の博物誌が重なりあっている。」[2]

こうした定式や、マルソーの刺戟的な集団論を参照しながら『人間喜劇』の世界の構造をあきらかにするのは、私たちの仕事であろうし、そのさきには『ルーゴン・マッカール』の世界、および二十世紀の大河小説の世界との比較検討がひかえているだろう。そして、この課題をといていくことは、同時にバルザックを現代という私たちの窓から再発見していくことになるのである。

註 1　Marceau, op. cit., p.7.

　 2　Bardèche, op. cit., p.387.